

コロナ禍における当院地域包括ケア病床の役割 ～2020年度を振り返って～

施設名：中洲八木病院

発表者：井関 博文 (理学療法士)

共同演者：松本 佳久 (作業療法士) 吉本 美紀 (理学療法士) 阿部 さつき (看護師)

花本 英美 (看護師) 中村 恵実子 (看護師) 田渕 葉月 (看護師)

天野 亜耶 (社会福祉士) 倉田 浩充 (医師) 日浅 匡彦 (医師)

【はじめに】

2020年2月に我が国で確認された新型コロナウイルス感染症(以下, COVID-19)は世界で拡大し, 2021年7月現在も終息の兆しはない. 2020年度はCOVID-19により, 「コロナ禍」と呼ばれる特別な時を過ごした. 医療も例外ではない. COVID-19に対して2020年の診療実績を振り返り, 当院における影響を検証し, 地域で担う役割について考える.

【方法】

地域包括ケア入院医療管理料1を算定する35床(以下, 地域包括ケア病床)における2019年度(pre COVID-19), 2020年度(post COVID-19)の診療実績を後方視に比較し, COVID-19の影響を検証する.

【結果】

地域包括ケア病床の入院件数は, pre: 342件, post: 344件と大きな変化はなかった. しかし, 救急搬送による入院件数は, pre: 86件(地域包括ケア病床67件), post: 106件(地域包括ケア病床84件), 地域包括ケア病床の救急搬送件数が増加した. 大腿骨近位部骨折の院内手術も, pre: 46件, post: 54件と増加した. 一方, 急性期病院で大腿骨近位部骨折の手術後, リハビリテーション目的で当院回復期リハビリテーション病棟に転入となった件数は, pre: 20件, post: 14件と減少し, 全体の入院相談件数もpre: 271件, post: 181件と減少した.

【考察】

当院は救急(二次)指定医療機関であり, 一般病床は無いが地域包括ケア病床で整形外科手術を行っている. 大腿骨近位部骨折に対する観血的骨接合術や人工骨頭置換術が多い. 2020年度は, COVID-19によって県内の高度急性期を担う病院がその対応に追われ, 例年と異なる医療情勢であった. さらに, 2021年5月3日に県内過去最高値である新規感染者数が60名と発表され, 翌日の新聞記事では, 高度急性期病院におけるCOVID-19の患者対応が逼迫し, 本来救えるべき患者の命が救えない危機に陥っている「県内の救急医療の危機」が叫ばれた. そのような状況のなか, 以前はリハビリテーションを中心とした入院相談に対応してきたが, 2020年度はその件数が減少し, 救急搬送件数や大腿骨近位部骨折に対する手術件数が増加した. 2020年度はリハビリテーション医療のみならず, 「救急医療の危機」に対しても, 微力ながらも貢献できたのではないであろうか. COVID-19はどのように推移するか予測できないが, 今後も「地域包括ケア病床」を有効的に活用し, 地域医療に貢献していきたい.

【まとめ】

2020年度はリハビリテーション医療のみならず, 地域包括ケア病床における「地域の救急医療」や「手術治療」によって, 地域医療に貢献ができた.